

韓国絵本『天女かあさん』の日本語訳に見られる方言翻訳の問題

尹惠貞

(一橋大学大学院博士後期課程)

Abstract

This article examines a Japanese version of “The Strange Mum” originally published in Korea in 2016. Although the original text is written in standard Korean, the Japanese translation, published in 2017 with the title “Fairy Mum” employs a Kansai dialect to one character and Standard Japanese to the second character. Why has been it translated in this way. I clarify this issue and the effect of dialect use.

1. はじめに

2016年韓国で『イサンハン オンマ』(おかしな母さん:筆者直訳)、ペク・ヒナ作(韓国語版を Source Text, 以下 ST とする)が出版され、その翌年の2017年に日本で『天女かあさん』が、長谷川義史訳、ブロンズ新社(日本語版を Target Text, 以下 TT とする)で翻訳出版された。STの舞台は韓国ソウルであり、テキスト自体にそのことが明記されているので、絵本の文体と三人の登場人物の話体は全て標準韓国語で書かれている。これに対し TT では、ソウルという指標はカタカナで「ソウル」と翻訳されているが、絵本の文体と登場人物の二人の話体は標準日本語ともいえるし、日本語方言ともいえる言葉で翻訳され、天女の話体は日本語方言で翻訳されている。何故このような現象が生じるのだろうか。本稿はその理由を分析し、方言翻訳の問題とその他の翻訳の問題とに分けて考察すること、及び本絵本における方言使用の効果を明らかにすることを目的とする。

上記作品で、標準韓国語が日本語方言で翻訳される理由は、(1)翻訳者が関西の出身であり、関西方言話者であること、そして(2)絵本の絵を読みとく(ドゥーナン,2013)ことで翻訳をしたことが考えられる。しかし、「STとTTの間」にはこの二つの理由のみでは説明できない諸事象が生じている。そこで、本稿ではSTとその直訳、そしてTTを並べて分析し、併せて絵も分析する。このような分析方法を用いるのは絵本の特殊性のためである。すなわち、絵本の一般的な定義によれば、絵本とは言葉と絵に相互作用がある本であるとされる。より具体的に言うと、藤本(2007:20)は、「絵本では、「文章」は読むだけでなく見るものであり、「絵」は見るだけでなく読むものなのです」と述べている。この点、ヤーコブソン(1959/1973:57-58)は、「記号法間翻訳は、ことばの記号をことばでない記号体系の記号によって解釈することである」とするが、藤本が前述した

ように、絵本の文章は見るものでもあり、絵は読むものでもあることから、ヤーコブソンのいう言語から非言語への解釈のみでは、カバーしきれない部分があることは明らかである。なぜならば、絵本翻訳は、言語間でただ言葉を置き換えるだけでは足りず、ST の言葉を削除し、絵を読みとくことでそれを TT の言葉に移し換える必要も生じる場合があるからである。

また日本語方言で訳出されることについては、役割語という概念を用いて分析を行う。役割語とは「ある特定の言葉遣い(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと、特定の人物像(年令・性別・職業・階層・時代・容姿・風貌・性格等)を思い浮かべることができる時、あるいは特定の人物像を提示されるとその人物がいかにも使用しそうな言葉遣いをいう」とされる(金水,2003:205)。このような役割語は、その言語の話者が現実に対して持っている観念であり、いわゆる「仮想現実」(ヴァーチャル・リアリティ)(金水,2013:37)のことである。この検討を行うのは、日本語方言(本稿では関西方言)が用いられる理由が特定の容姿・風貌などを有するキャラクターにあるのではないかと考えられるからであり、併せて役割語としての方言使用効果を明らかにするためである。

以下では、本絵本のあらすじの紹介と「絵を読む」という方法論で特徴的な絵を分析する。

1.1 あらすじ

天女が白い雲に墨をこぼしてしまったため、ソウルに大雨が降った。その日、ホホという男の子が体調を崩し、学校を早退する旨ホホの母の会社に電話があった。母は仕事があつてすぐには帰れないので、祖母に電話をした。電話口からは雑音しか聞こえてこなかったが、母は祖母に電話が通じたのだと思い、ホホが早退したので家に行ってみてくれるように頼む。しかし、電話が通じた先は何故か天女であった。天女は仕方なく、雲に乗ってホホの面倒を見に行くことにした。天女が先にホホの家に着いて、たまごを探し始めると、ホホが家に帰って来たので、ホホの母に頼まれてここに来た、とホホに告げた。ホホは最初驚いていたが、天女の優しい声に安心した様子だった。何を食べるかと天女が聞くと、ホホはたまごを見て、たまごスープと答える。そこで天女はスープを作ってホホに飲ませた上に、たまごを使って目玉焼きを作り、それを家の中に浮かばせて家を温めた。また、乾燥を和らげるために、たまごの白身と牛乳を混ぜて霧を作り、霧雨を降らせた。さらに、母が帰ってくるまで、雲のベッドを作ってホホをそこに寝かせた。暫くすると母が家に戻り、ホホが寝ているのを見て、ホッとして雲の上で一緒に眠ってしまう。それから二人が台所へ行って見ると、めちゃくちゃになった台所に大きなオムライスの夕食が用意してあった。

1.2 絵を読む

絵本を読むためには、他の著作物などと異なる絵本の特性に留意しなければならない。この点について、ドゥーナン(2013:6)は、絵本の絵をしっかりと読むためには、a)判型、b)見開き、c)枠、d)絵内文字、e)見返し(前・後)などの違いが持つ目的やその効果に注目すべきことを説いている。本稿では、これに依拠しつつ、以下分析を行う。

a) 判型

『天女かあさん』は縦長版(288×225 mm)¹⁾の絵本である。登場人物や調度品などはいずれも絵ではなく紙粘土で作られ、写真撮影されて各ページを構成している。

b) 見開き

本絵本は、両面見開きページが 9 箇所 (pp.2-3、pp.6-7、pp.8-9、pp.16-17、pp.22-23、pp.24-25、pp.26-27、pp.28-29、pp.30-31)ある。特に、pp.6-7(図 1)に関して言えば、両面見開きではあるが、縦におおよそ 3 等分され、真中の部分はページを跨っており、他の両面見開きとは異なる構成となっている。

図 1: pp.6-7 (ブロンズ新社 HP)



c) 枠

枠に関して本絵本では、片側ページが絵で満たされている(以降便宜上、片側全絵ページと呼ぶ)場合、それに向かい合うページは必ずと言っていいほど「枠」²⁾の手法が使われ、その中にコマ³⁾として絵が入っている。このように枠とコマの手法を使うことで、主人公の寂しい気持ちや驚きの気持ちを表わしたり、物語においてとりわけ注目すべきアイテムや所作を表現したりすることに成功している。本絵本は縦長版絵本となっているため、横長版絵本のように広い空間を使えるわけではないが、枠やコマ・片側全絵ページ・両面見開きページを交互に使うことで、雨のシーンやホホの家の中の奥行き、さらに調度品の様子などを鮮明に目にする事ができる。これらのことから、本絵本は絵と言葉だけでなく、枠やコマなどを含め全体的に精緻に考察されデザインされた絵本である、ということができよう。

d) 絵内文字

さらに、ST で描写された街並みにはハングル文字の看板が多く出てくるが、TT では絵は変わらないという原則に沿い、絵内文字(ニコラエヴァ&スコット,2011:87)として処理され、訳出はされていない。

e) 見返し

最後に、本絵本の見返し(藤本 2007:183-187)も特徴的である。まず、前見返しにたくさんのたまごが山のように積まれており、たまごが重要なアイテムであることが示されている。また、後見返しは天女が羽衣を着ずに雲に乗り、すっかり雨が上がった空を帰っていく場面となっている。この後見返しの直前のページ(p.32)では、天女の羽衣がホホの家の衣紋かけに掛かっており、ホホの母が不思議そうに見ている場面が、白地の枠の中の小さなコマに納まっている。これに対

して、裏表紙は読者がベランダの外からホホの家の窓を覗きこむ構図となっており、外はまだ大雨が降り続き、洗濯物が外に干しっぱなしになっている。裏見返しでは、天女が飛んで帰る空は雨が降っていないが、裏表紙のホホの住む町はまだ雨が降っている。天女の飛んで帰る空は、ホホの町のさらに上にあること、もしくはこれからホホの町も雨が上がることを暗示しているのであろう。

2. 言葉・翻訳・絵

本章では、絵本に書かれている言葉をページ順に文体と話体に分け、話体については a) ホホの母の話体、b) 天女の話体、c) ホホの話体に分ける。それぞれについて、まず ST、次に筆者による日本語への直訳、その後に TT の順で提示した(直訳はカッコ書きにしている)。また絵本であることに鑑み、言葉の羅列のみならず、絵との関係についても、ここで論じている。なぜならば、絵本にはページ・ターナーという機能があり、藤本(2000:97)が述べるには、「絵本がページをめくって読む表現媒体である以上、絵本はめくって文章を読み、あるいは、めくって絵を見ることにその特質がある」からである。

2.1 文体

p.1(絵本のページ数、以下同)

ST: ‘이런 이런……’

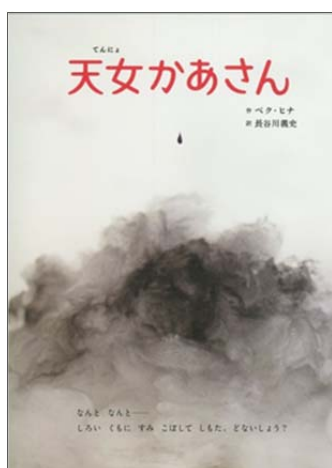
흰 구름에 먹을 쏟아 버렸네. 이를 어찌지?’

(<あらあら……白い雲に墨をこぼしてしまった。どうでしょう？>⁴⁾)

TT: なんと なんと……

しろい くもに すみ こぼして しもた。どないしょう？(下線部筆者、以下同)

図 2: p.1



ST は標準韓国語で書かれているが、TT は下線部のように関西方言で訳出されている。ST のシングル引用符 (‘’) は「心の声」⁵⁾を表わす記号であるとされ、TT においては自由間接話法⁶⁾(山口, 2009:218)として訳出されている。なお、この台詞とも言えるようなシングル引用符の中の一文

は天女の声であり、TT では関西方言を話す天女の言葉となっている。

絵本では多くの場合、1 ページ目は絵本のタイトルと著者名が記されるのが一般的であるが、本絵本においてはそれ以外に前述の言葉が記され、いわば絵本の導入部分となっている。また、タイトルの下にはそれに合わせて黒い炭のようなものが上からちょうど一滴垂れてくるような絵が描かれ、その下は灰褐色の雲とも霧とも言えるような何かが立ち込めた絵が描かれている。ST では、天女の心の声がこのページの絵と符合し、TT では、文体、つまり自由間接話法がこのページの絵と符合している。

次のページをめくると、

pp. 2-3

ST:그날,서울에는 엄청난 비가 쏟아졌습니다.

(その日、ソウルではとんでもない雨が降りました。)

TT:そのひ、ソウルでは とんでもない あめが ふった。

ST は標準韓国語で書かれ、TT でも標準日本語で訳出されている。本絵本では、登場人物の語体以外の文体は第三者が語る形式となっており、その視点は基本的に第三者ということになる。ただ、前述の 1 ページのように第三者の視点が登場人物の視点へと変わり、自由間接話法になるところも何か所か見受けられる。また ST では、ソウルという指標が書かれ、TT においても「ソウル」と訳出されていることから、ソウルで使われているであろう標準韓国語が標準日本語として訳出されたと考えられる。この他に ST では「降りました」と敬体が使われているが、TT では「ふった」と常体で訳出されている点に違いが見られる。

なお、ST の下線部「엄청난」を字義とおり翻訳すれば、TT のように「とんでもない」(ST の直訳でもそうである)と訳されることを指摘しておく。

このページの絵は、ソウルの普通の景色であるマンションが立ち並ぶ一角が、両面見開の下方に描かれている。多くのビルがひしめき合っていることから、かなり遠方からのショットであるという印象を与えている。絵の上方には層の厚いどんよりした雲が掛かり、大粒の雨が降り注いでいる。なお、上記の言葉が両面見開きの右側ページの中央に白い字で書かれている点は、ST と TT に違いはない。

本文中にはこれ以外にも文体が散見されるが、特に次章以下で考察の対象とする部分のみについて紹介しておきたい。

pp. 20-21

ST:씨익씨익……썩썩썩…….

하지만 곧 코가 막혀 답답해졌습니다.

“저런! 집 안을 너무 말렸나?”

이상한 엄마는 달걀흰자를 모아 찰찰찰 거품을 냅습니다.

그런 다음 보글보글 끓는 우유에

거품을 한 국자씩 떠 넣었습니다.

그러자 하얀 구름이 몽실몽실 떠올랐습니다.

하얀 구름은 거실 구석으로 흘러가

조용히 안개비를 뿌려 주었습니다.

(ひいひい……、ぜえぜえ……)

けれども、すぐに鼻がつまり苦しくなりました。

「あら、あまりにも家の中を乾燥させた？」

おかしな母さんは卵の白身を集め、シャカシャカシャカと泡を立てました。

それからぐつぐつ沸いた牛乳に泡をひとたまずつ入れました。

すると、白い雲がふっくら浮かびました。

白い雲はリビングの隅に流れ、静かに霧雨を降らせました。)

TT:はあはあ……ぜえぜえ……

けれど すぐに はなが つまって いきが くるしく なりました。

「あちゃー、いえの なかが えらい かんそうしたん ちがうか？」

へんてこな かあさんは たまごの しろみで

チャッチャッチャッと あわを たてました。

そして こんどは その あわを ぐつぐつ わかした ぎゅうにゅうに

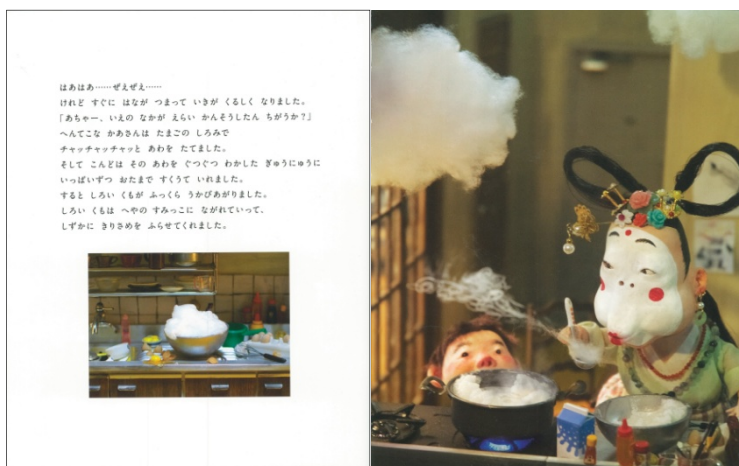
いっばいずつ おたまで すくうて いれました。

すると しろい くもが ふっくら うかびあがりました。

しろい くもは へやの すみっこに ながれていって、

しずかに きりさめを ふらせてくれました。

図 3: pp.20-21



ここでは、ST は語り手がいる三人称の文体と天女の話体で構成されており、標準韓国語で書かれている。これに対し TT では、文体はおおむね標準日本語で訳出され、天女の台詞は下線を引いたように関西方言で訳出されている。ここで「おおむね」としたのは、「おたまで すくうて いれました」と言う記述があるためである。標準日本語であるならば、「すくう」の連用形は「すくって」のはずであるが、ここでは関西方言の記述であると思われる①「すくうて」となっている(次

章で考察する便宜上、通し番号がこの①を含め⑤まで出てくる)。この点、後に述べる pp.30-31にも同じような現象が起きているので、これについては別に項目を設けて次章で共に考察したい。

絵については図 3 を見ると、それ以前のページでもしばしば用いられるコマの手法が使われており、コマの部分には卵の白身がボールの中で泡立っていることが描かれている。コマの向かいのページは片側全絵ページとなっており、天女が白身を火に掛けた牛乳に入れ白身の泡は大分減って、白い雲がもくもくとできているのが描かれている。その様子をホホがじっと見ている。

次に、本絵本の最後の文体に相当する両面見開きのページの言葉と絵である。

pp.30-31

ST: 한숨 폭 자고 나니, 엉망이 된 부엌에

엄청난 저녁밥이 차려져 있었습니다.

(ひと眠りして起きると、散らかった台所に

とんでもない夕飯が用意されてました。)

TT:ひとねむりして おきたら、

めちゃくちゃに なった だいどころに

どえらい ゆうはんが ようい して ありました。

図 4: pp.30-31



ST も TT も文体として書かれているが、どちらもホホの視点からの文体のように書かれている。そして ST はホホの自由間接話法として標準韓国語で書かれており、TT もホホの自由間接話法として訳出されている。しかし、ここでも②「どえらい」という関西方言が使われている。この点についても以下で別途考察する。

絵については図 4 の通り、両面見開きページとなっており、食卓をほぼ埋め尽くすほどの大きなお皿にオムライスがおかれ、ケチャップでホホの顔が描かれている。その大きなオムライスを見てホホとホホの母がびっくりして、口をあんぐり開けている様子も描かれている。オムライスの左斜め前のガラスのコップに、天女が髪にさしていた花の飾りが三つほど置かれている。

絵についてはこの他に次のページの白地の枠に小さなコマがあり、天女が忘れた羽衣をホホ

の母が不思議そうに見つめている絵が描かれている。

2.2 話体

a) ホホの母の話体

ホホの母の話体の例を示す際、文体と分けて示すことは困難であるので文体もともに示す。

p.5

ST: ‘이름 어찌지?’

엄마는 호호를 부탁하려고 여기저기 전화를 걸었습니다.

하지만 전화는 연결되지 않고 이상한 잡음만 들려왔습니다.

(<どうしたらいいの?> ママはホホのことをお願いしようとあちこち電話をしました。けれども電話はつながらず変な雑音だけが聞こえてきました。)

TT: 「どうしよう?」

かあさんは だれかに ホホのことを たのもうと、

あち こち でんわを かけました。

けど でんわは つながらず、へんてこな ざつおんだけが きこえてきました。

ST はシングル引用符(‘’)を用い、ホホの母の心の声を<どうしたらいいの?>と表現している。また、ここでもソウルという指標が縛りを掛けているので、ホホの母親は標準韓国語を話す人物として書かれている。

これに対し TT では直接話法が使われているが、「どうしよう?」ではなく③「どうしよう?」と「よ」が拗音として訳出されている。この点については若干検討が必要であると思われる。なぜならば、このタイポグラフィ⁷⁾を見るかぎり「どうしよう?」が標準日本語なのか、それとも日本語の方言なのかを即断することは困難であるためである。そこでこれについてもあとで別の考察の項目を設け、問題となるホホの母の話体はまとめて考察したい。

このページの絵は大きな白地の枠に、右上寄りにページの四分の一ぐらいのコマが使われており、そこには学校を早退して傘をさし一人で家に向かっているホホの姿が描かれている。白地に小さなコマが使われていることにより、ホホの体調の悪さや心細さが表現されている。

次のページをめくると、

p. 6

ST: 그때,

“여보세요…….”

전화기 너머에서 희미한 대답이 들렸습니다.

(その時、「もしもし……」受話器の向こうから微かな返事が聞こえました。)

TT: そのとき

「もしもし……」

じゅわきの むこうから

かすかに へんじが。

ST は「もしもし……」以外は第三者の語りの文体で標準韓国語として書かれ、TT も同じように第三者の語りの文体で標準日本語として訳出されている。ただ、ST の「聞こえました」は、TT では訳出されていない。

絵ではホホの母が会社の自分の机の椅子に座り電話で話す様子が大きくクローズアップされている(図 1 最左)。

pp. 6-7

ST: “여보세요? 엄마?” “으……응?”

“휴, 살았다. 호호가 아프대요. 엄마가 집에 좀 가 봐 주실래요?”

“호호?”

“미안해요, 엄마. 일 끝나자마자 곧장 갈게요!”

(「もしもし? お母さん?」 「ん……うん?」

「ふう、助かった。ホホの具合が悪いんですって。お母さんが家に行ってみてくれませんか?」

「ホホ?」

「ごめんなさい、お母さん。仕事が終わる次第、すぐ帰りますから!」

TT: 「もしもし? かあさん?」 「ん……うん?」

「ああ よかった。ホホが びょうき なんです。かあさん ちょっと いえに 行って みてくれませんか?」

「ホホ?」

「すいません、かあさん。しごと おわりしだい、すぐに かえりますから」

ホホの母は自分の母親に電話が掛かったと思い、矢継ぎ早にホホが病気になったので家に行き、ホホの面倒を見てくれるように頼んでしまう。ここで、ホホの母は自分の母親に電話が掛かったと思っているが、電話のかかった先は実は天女であった。韓国では自分の親に対しても、主体敬語法⁹⁾(李・他, 2004: 238)が使われるので、この部分を直訳すると「お母さん、家に行ってみてくれませんか?」となる。この点、TT を見ると、ST とほぼ変わらず「かあさん ちょっと いえに 行って みてくれませんか?」と訳出されている。日本でも韓国同様自分の母親に対してこのような口調で話をするだろうか。これについては、後にホホの天女に対する話体と比較して考察を行いたい。

ここに対応する絵(図 1)は、前章の「絵を読む」ところで述べたように、両面見開きとなっている。その構図は縦にほぼ 3 等分されており、左側には電話をしているホホの母、右側には影で表された天女が電話を受けている様子が描かれている。その中間に双方の発する言葉が書かれているが、言葉は白抜きで、その背景は黒地にモヤッとしたスプリング状のものが幾重にも重なっているような描写になっており、電話が混線している状態を示すものとなっている。

b) 天女の話体

天女の話体の例を示す際もホホの母の話体と同様、文体と分けて示すことが困難であるので文体もともに示す。

pp. 12-13

ST: “그래 그래, 네가 호호로구나.
너희 엄마 부탁을 받고 부랴부랴 왔단다.
오늘은 날 엄마라고 생각하렴.”
호호는 조금 겁이 났지만,
따스한 목소리에 웬지 마음이 놓였습니다.

(「そうかそうか、あなたがホホなのね。

あなたのお母さんの願いを聞いてわざわざ来たのよ。今日は私を母さんと思いなさい。」
ホホは少し怖かったけど、温かい声に何か心が落ち着きました。) (波線: 筆者)

TT: 「ほ ほう。おまえが ホホ。
おまえの かあさんの ねがいをきいて
あわてて やってきたんや。
きょうは わたしを かあさんと おもいなはれ」
ホホは ちょっと びっくりしましたが、
ほんわかした こえを きいて なぜか ほっとしました。

図 5: pp.12-13



ST では、天女の話体と文体が標準韓国語で書かれている。これに対し TT では、天女の話体は関西方言で、文体は標準日本語で訳出されている。天女の話体で特に注目すべきは直訳で示している「今日は私を母さんと思いなさい」及び次の例 (pp.22-23) で示している「心配しないで少し休みなさい」である。この部分は、ST では「рым」(リョム: 許諾命令)、TT では「なはれ」と訳出されている。ここは考察の章で別途検討する。

絵については図 5 の通り、白地の枠に比較的大きな縦長のコマが中央に置かれ、コマの中に

は玄関から赤ら顔で家の中に入り、天女を目にしたホホが描かれている。向かい合うページは片側全絵ページであり、玄関と繋がっている台所におかめのような顔をした天女が立っている。天女は玉や真珠でできたイヤリングやネックレスをし、髪に花の形で彩られた髪飾りを付けている。

pp.22-23

ST:“이제 한숨 폭 자고 나면 엄마가 오실 게다.

걱정 말고 좀 쉬렴.”

이상한 엄마는 가장 크고

폭신한 구름을 골라 호호를 눕혔습니다.(p.22)

“아…….”(p.23)

(「これからひと眠りしたら母さんが帰って来るわ。

心配しないで少し休みなさい。」

おかしな母さんは一番大きくて柔らかい雲を選んで、ホホを寝かせました。

「あ……」)

TT:「これで よっしゃ。

ひとねむりして おきたら、

ほんまの かあさんも かえってくるわ。

しんぱいせんと ちょっと ねなはれ」

へんてこな かあさんは いちばん おおきな

ふわふわの くもを えらんで

ホホを ねかせてくれました。

図 6: pp.22-23



ST は天女の話体と文体、ページを変えてホホの「あ……」という台詞から構成されており、標準韓国語で書かれている。TT は天女の話体は関西方言で、文体は標準日本語で訳出されている。ホホの話体である「あ……」は削除されている。また興味深いことに、ST で天女はホホの

母のことを「かあさん」と呼んでいるが、TT では、「ほんまの」と修飾語が付けられており、「へんてこな」かあさんと対比する形になっている。

絵については図 6 の通り、両面見開きのページとなっており、左ページ前方に観葉植物があり、その上に天女が作ったであろう雲が浮かび、観葉植物に雨を降らせており、その雲にこのページの言葉が書かれている。そのすぐ横には、両ページを跨いでふわふわの雲にホホが寝ている様子が描かれている。そのさらに右横には机が置かれ、ホホの本やおもちゃなどが散乱している。

c) ホホの話体

ホホの話体の例を示す際もホホの母と天女の話体同様、文体と分けて示すことが困難であるので文体もともに示す。

pp.14-15

ST: “자, 뭘 좀 먹으련? 아플 땐 속이 든든해야지.”

호호는 식탁 위에 놓인 달걀을 보았습니다.

그래서 생각나는 대로

“달걀국이요.”하고 대답했습니다.

“달걀국? 그건 어떻게 만드는 거야?”

“그냥……국물에 달걀을 풀어서 만드는 거 같던데요.”

“흠 안개 만드는 거랑 비슷한데? 어쨌든 해 보자꾸나.”

(「さあ、何を食べる？痛い時はしっかりたべないと」

ホホは食卓の上の卵を見ました。それで思い出すままに、

「卵スープです」と答えました。

「卵スープ？それはどう作るのかしら？」

「ただ……スープに卵をといで作るみたいでした」

(「ふむ、霧作ると似てるわね？とにかく作ってみましょう」)

TT: 「ほな なんぞ たべますか？」

びょうきのときは たべんと あきまへん」

ホホは しょくたくのうえの たまごをみて、思いついた まま、

「たまごスープ」と いいました。

「たまごスープ？それは どないして つくるんや？」

「ただ スープに たまご といて いれるだけ」

「ふーん さよか。きり つくるのに にてるけど……、

ほなら まあ やってみようかいな」

図 7: pp.14-15



この箇所は天女とホホが話す場面となっており、ST では文体を含めてすべて標準韓国語で書かれている。またホホの天女に対する話体は主体敬語になっている。TT では天女の話体は関西方言で、ホホの話体は標準日本語と思われる言葉で訳出されているが、敬語は使われていない。この敬語が使われていないホホの話体(「たまご スープ」と「ただ スープに たまご といて入れるだけ」)については、⑤としてホホの母が天女と電話で話す際にそのまま敬語で訳出されていることと比較考察したいと思う。

なお、絵については、左ページが片側全絵ページになっており、右ページがコマの手法が使われて、天女がホホに卵スープを作っている場面になっている。

次のページをめくると、

pp.16-17

ST: 이상한 엄마가 끓여 준 달걀국은 뭔가 이상한 맛이었지만,
호호는 후후 불면서 모두 마셨습니다.

그러자 부엌 가득 노란 안개가 끼었습니다.

(おかしい母さんが作ってくれた卵スープはおかしい味でしたが、
ホホはふうふうしながら全部食べました。

すると、台所いっぱい黄色い霧が立ち込めました。)

TT: へんてこな かあさんが つくってくれた たまごスープは、
なにか へんてこな あじ でした。

それでも ホホは ふうふうしながら ぜんぶ のみました。

にわかに だいどころ いっぱい きいろい きりが たちこめました。

ST: ‘이상하다. 왜 눈앞이 뿌옇지?’

호호는 식탁에 엎드렸습니다.

뜨거운 국물을 마셨는데도 온몸이 으슬으슬 떨렸습니다.

(<おかしいな、なんで目の前がぼやけるかな? >

ホホは食卓に伏せました。
温かいスープを飲んだけど、全身がブルブル震えていました。)
TT:「あれっ、なんで めのまえ ぼやっと してきたんやろ?」
ホホは しょくたくのうえに たおれこんで しまいました。
あつい スープを のんだのに からだじゅうが ぞくぞくしてきました。

図 8: pp.16-17



全体を通して、ST の文体は基本的に第三者が語る形式として記述されている。ただ上記の部分では、一か所だけシングル引用符(‘’)を用いて、ホホの心の声が標準韓国語で書かれている。この点については、TT でも文体は第三者が語る形式なので、標準日本語で訳出されている。しかし、心の声であったホホの声は、TT では話体が変わり、加えて関西方言として訳出されている(下線部)。このような訳出については、図 7 の絵も関係して問題となるので、次章でその原因を共に考察する。

3. 考察

これらの分析に基づいて、方言翻訳の問題とその他の翻訳の問題とに分けて考察することができると考え、方言翻訳の問題は主に天女の話体であり、その他の翻訳の問題は文体、ホホの母及びホホの話体を含むと考える。

3.1 方言翻訳の問題

方言翻訳の問題は主に天女の話体であるので、そこに焦点をあて考察する。天女は、ST では「ソウル」という指標から標準韓国語で書かれ、TT では関西方言として訳出されている。このような訳出の理由としては、ヤーコブソンの「記号法間翻訳」により関西方言として訳出されたのではないかと考えられる。金水敏の「役割語」として説明可能かどうか問題となる。ここで、図 3(本稿 p.6)及び図 5(本稿 p.11)の天女を詳細に観察すると、おかめのような顔をしており、赤い口紅に大きなイヤリングやネックレス、大きな髪飾りをして非常に派手な様相である。また、ホホの面倒を見ている間、ひとりでひっきりなしに話し続けており、ホホはずっと聞き手であった。これは派手好きでおしゃ

べり好き、という大阪人・関西人のステレオタイプに当てはまると考えられる。このようなことから、TT では天女の絵である独特の容姿や風貌を読み込んで関西方言として訳出したものと考えられる。

次に、天女の話体で特に興味深いのは、pp.12-13 と pp.22-23 (本稿 pp.10-12) の ST で出現する許諾命令文「림」(リョム)である。韓国において年配の女性や、比較的若い母親であっても「台詞」でよく使われるものである。このように考えると、この許諾命令文は社会方言や位相とも考える。しかし、実際の韓国社会においてこのように話す母親は皆無であるし、さらに、今では年配の女性であってもこのように話すのはまれである。ST における天女の話体がそもそも「役割語」と考えるのであれば、標準韓国語の役割語「림」(リョム)が関西方言の役割語「なはれ」として訳出されたと考えることができるであろう。

3.2 その他の翻訳の問題

上述のように天女の関西方言は役割語として用いられている。ただ、本作品ではこれ以外にも関西方言が出現するのでそれについて以下考察する。

a) 文体

本絵本の文体は、基本的に第三者が語る形式となっていた。文体であっても例外的に登場人物の語りの視点に変わり、自由間接話法となっている箇所が p.1 (本稿 p.4) と pp.30-31 (本稿 p.7) に出現する。p.1 は天女の視点で語られているので、TT では関西方言で訳出された。

①「すくうて」(pp.20-21, 本稿 pp.5-6) は、語り手が別にいる三人称の文体の箇所であり、②「どえらい」(pp.30-31, 本稿 p.7) も一応文体の形を備えてはいるものの、三人称の視点からホホの視点に変わった自由間接話法になっており、両者は異なっている。

このうち、まず「すくうて」については、翻訳者が関西弁話者であることから、ホホの母の話体で述べる「どうしよう？」と同じ様な現象が起き、その読みは読者に委ねられていると解釈することができるが、「どうしよう？」よりはタイポグラフィ的に拗音でない「う」に読者は影響を受けるのではないかと思われる。

「どえらい」については、一般的にテレビ等メディアの影響で、標準語と標準語以外の境界線がどんどん薄くなってきている。特に関西方言に関しては、メディアでよく耳にすることもある。また、ホホの話体が天女に引っ張られていくように(後述)、天女が作っておいたオムライスの大さに驚いたことや、オムライスの前のガラスコップに天女が髪にさしていた花の飾りが三つ残されていること(図4)、天女が羽衣を忘れていったことなど、ホホの家の至るところに天女の雰囲気が残されており、これが関西方言の「どえらい」に表現されていると考えられるのではないだろうか。pp.2-3 (本稿 p.5) の ST では「どえらい」と訳出されたものと同じ形容詞(엄청난: 下線部)が出ているが、そこでは「どえらい」ではなく「とんでもない」と訳出されている。それは物語が語られる当初は天女の雰囲気に影響されていないためであり、天女の雰囲気が「どえらい」に反映されていることがわかるものであると言えよう。

b) ホホの母の話体

まず、③「どうしよう？」(p.5, 本稿 p.8) は翻訳者の長谷川氏にたずねたところ、彼自身が大阪出身で幼い頃より「どうしよう」を上記のように表記していたと筆者の質問に答えたことから、翻訳

者自身は「どうしょう？」は関西方言のつもりであったと思われる。ただし、ここでは以下の点で留意が必要である。絵本は読み聞かせ・読み合いを基本の読み方とする印刷・出版物だという点である。翻訳者がいくら「どうしょう？」を関西方言として設定しても、読み手＝声を出して読み聞かせや読み合いを行う者が、関西方言を第一言語としない場合は「どうしょう？」というふうには、「よ」の拗音に注目することなく、いつもの習慣で読んでしまう場合もあるし、正確に関西方言として発音できない場合もあるだろう。

次に、④「かあさん ちょっと いえに 行って みてくれませんか？」(pp.6-7,本稿 pp.9-10)は、ホホの母が、ホホが早退したので電話でホホの面倒をお願いする場面の話体である。前述したとおり、ST では自分の母親に対しても主体敬語法を使うので、全く問題にならない。しかし、TT では、そもそも自分の母親に対して ST のように主体敬語法を使うのか。これと対比して、ホホの天女に対する話体では主体敬語法であったものがこのように(⑤「たまご スープ」、「ただ スープに たまご といて 入れるだけ」pp.14-15,本稿 pp.12-13)翻訳されている。ST でいずれも敬語が使われている④と⑤が、TT ではなぜ違うように翻訳されているのだろうか。それについては絵によって読み解くことができるだろう。

図 1 からわかるように④では、ホホの母は会社のデスクから自分の母親に電話をしているので、TT においては主体敬語法による直訳というよりは、「会社」というシチュエーションから ST の敬語がそのまま訳出されたと考えることができる。他方図 7 を見ると⑤では、ホホが天女と二人きりで、天女に何を食べるかと質問されているので、TT においては、ホホが天女に心を許した自分の家であるというシチュエーションから、敬語が取り除かれた形で訳出されたと考えることができる。

c) ホホの話体

ホホの敬語の話体については上述したので、以下ホホの話体についてのみ考察する。

pp.16-17(本稿 pp.13-14)のホホの話体は、天女にたまごスープを作ってもらい、それを飲んでいた時のホホの話体である。ST ではシングル引用符を用い心で表わしていたところであるが、TT では話体が変わり「あれっ、なんで めのまえ ぼやっとしてきたんやろ？」と関西方言として訳出されている。ここでは何がおこっているだろうか。

前述したように、天女の派手好き・おしゃべり好きという大阪人・関西人のステレオタイプに当てはまるということは前述した通りである。また関西方言は音調が高く(山下,2013:17)、さらにおしゃべり好きの天女の音調の高い声を病気で熱のあるホホはずっと聞いていた、と考えるとホホの独り言が関西方言に引っ張られた可能性は高い。また「台所いっぱい黄色い霧が立ち込めた」こと、つまり、天女の優しい雰囲気や作ってもらった卵スープの温かさがホホを包んでいることが図 8 の絵からも分かるので、言葉と絵の双方からホホの言葉が関西方言に引っ張られたと考えられるだろう。

以上のように、『天女かあさん』の方言とその他の翻訳に分けて考察を行った。次章では、「おわりに」として、考察から得られた結論及び本絵本の方言使用の効果について述べておきたい。

4. おわりに

『天女かあさん』の言葉・翻訳・絵を分析し、天女に関してはその独特のキャラクターが役割語

としての関西方言に訳出することを可能にしたことを考察した。文体及びホホの母とホホの話体に関しては、おおむね標準日本語と読み取れる形で翻訳されているが、一部関西方言で翻訳されているところもあった。文体に関しては三人称の語り手がいるので、自由間接話法を除いては標準日本語で翻訳されたと見ることができるであろう。ただ、ホホの母とホホの話体については、それが標準日本語なのか関西方言なのか判断のつかない側面もあるが、それは読み聞かせ・読みあいの現場に任されていると考えることができる。

最後に、本絵本の関西方言使用の効果としては、この世のものではない「天女」が出現し、ホホの母とホホのピンチを救ってくれる、言わば天女の「人の良さ」、「屈託のなさ」、「親しみやすさ」を兼ね備えたキャラクターが関西方言を使用し、まさに「人の良さ」、「屈託のなさ」、「親しみやすさ」の効果をもたらしたと考えられる。その理由としては、関西方言が我々絵本読者にとってもメディアでよく耳にする最たる方言であること、また本絵本の天女の雰囲気ページをめくるごとに、絵のみならず訳語にも浸透していつていることが表れていたからである。

作者ペクに本絵本の「天女」に対して質問したところ、以下のような答えが返って来た⁹⁾。天女という存在は「日常にある小さな魔法のような瞬間です。過酷である現実の隙間から生まれる小さな慰めのようなもの」(筆者訳)と語っている。原作者のこのような思いは、「人の良さ」、「屈託のなさ」、「親しみやすさ」といった、関西方言を話す登場人物天女とその関西方言の影響を受ける登場人物への訳出と親和的であり、その思いが反映したものと思わされるのである。

.....
【著者紹介】

尹惠貞(YOON Hejeong) 一橋大学大学院言語社会研究科、博士後期課程在学中。社会言語学的観点から絵本研究に取り組んでいる。連絡先:h.j_yoon@khaki.plala.or.jp

.....

【註】

- 1) ブロンズ新社ホームページ[Online]<http://www.bronze.co.jp/books/post-128/>. 2018年11月5日アクセス。
- 2) 枠とは、絵がページいっぱいより小さい場合、紙の白い余白をいう。白い余白部分は絵本本体と関連した模様を入れた装飾的な縁取りの場合もあり、様々なスタイルの線を使う場合もある。
- 3) コマとは漫画でよく使われる技法でコマ割りのことである。
- 4) STにおける心の声の筆者直訳は地の文との区別をするために<>を用いる。
- 5) 韓国国立国語院[Online]<http://www.korean.go.kr> 2018年11月17日アクセス。「シングル引用符(‘)’は、心の中で言った言葉を表す時に使用する(筆者訳)。
- 6) 自由間接話法とは、時制と人称は語り手の視点を反映し、そのほかの直示表現は登場人物の視点を反映することをいう。
- 7) タイポグラフィとは、形や大きさ、使われている活字の種類、レタリングの配置、行の長さ、行間の幅、読みをうながす行の切れ目など、一冊の本のなかの文字に関係するすべてのデザインのことである。

8) 主体敬語法とは話者にとって尊敬すべき対象であれば、敬語を使うべき韓国語の敬語法の事である。

9) 2017年10月12日10:47メールにて、作者ペクに両絵本についてのテーマ「天女」について質問をしたところ、13:31に返信があった。

【引用文献】

Bader, Barbara. (1976) *American Picturebooks from Noah's Ark to the Beast Within*. New York: Macmillan Publishing.

ドゥーナン・ジェーン(2013)『絵本の絵を読む』(正置友子・灰島かり・川端有子訳) 玉川大学出版部

藤本朝巳(2007)『絵本のしくみを考える』日本エディターズスクール出版部

金水 敏(2003)『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店

ニコラエヴァ・マリア&スコット・キャロル(2011)『絵本の力学』(川端有子・南隆太訳) 玉川大学出版部

ペク・ヒナ(2017)『天女かあさん』(長谷川義史訳) ブロンズ新社

백희나 (2016) 『이상한 엄마』책 읽는곰.

李翊燮 李相億 蔡琬(著)梅田博之(監修)前田真彦(訳)(2004)『韓国語概説』大修館書店

山口治彦(2009)「視点の混在と小説の語り—自由間接話法の問題をめぐって—」坪本篤郎・早瀬尚子・和田尚明(編)『「内」と「外」の言語学』pp.217-248. 開拓社

山下義孝(2013)『関西弁講義』講談社